

故日下教授の業績

藤 島 達 朗

故日下教授は三河刈谷の御出身である。三河といへば宗門に於て歴史を學ぶものが直ちに思い浮べる二人の學者がある。その一人は満徳寺了祥師（一七八八—一八四二）であり、他は山田文昭師（一八七七—一九三三）である。了祥師を直ちに史學者といふことは妥當でないであらうが、その宗學研究の立場は著しく歴史的であり、黒谷大谷師資の問題に於ける、歎異抄をめぐる諸問題の論定に於ける、更に異義集の編纂に於ける、そこに示される史眼は屢々燃犀ですらある。まことに綿密精到な考證によつてきづかれたその學果は、宗門學術史上の異彩である。

次の山田師についてはあまりに新しく、ここに述べるまでもないと思ふが、日本佛教史特に淨土教史に於ける成果と眞宗史學の業績は、それぞれに於て正しくそのゆるぎない基礎と大綱を決定されたものであつた。師は明治四十三年三十四歳の若さを以て眞宗大學教授兼圖書館長となり爾來大正九年兩職を辭任せられるまで、前後十二年間率先館務に勵精すると共に着々と右の學績をあげられたのである。故日下教授はこの館長のもとに大正元年七月眞宗大谷大學を卒業すると共に幹事として入館

された。そして大正十二年大谷大學助教授に任じて退職されるまでこれ又十二年間、その大部分を右の期間が示す如く山田館長のもとにあられたのである。そして席を接する同僚には後の藤原猶雪博士がゐられた。今日我々は本學圖書館に於て山田師や故教授藤原博士等の筆になる幾多の影寫本に接するが、その稀觀本並に宗史一般史の史料に斯界有數を誇るもの、もとより三百年の傳統の蓄積する所あるによるとはいへ、この館長並に二師等の長き忍苦の努力によるもの多きことを思はねばならない。右の三師を中心とする圖書館に基礎を置き、故橋川正教授等をも加へて、「佛教史學會」が形成され、法水分流記、玄義分抄、佛光寺小部集等の史籍の覆刻が行はれたのもこの期間である。諸師は後それぞれ我國佛教史學界に巨歩を進められたのであるが、特にかつて席を並べられた藤原博士と故教授が東西兩都に對峙して斯學の進運に一入力を致されたのは、奇しき因縁であつたといへよう。

二

故教授の處女出版は大正十二年立教開宗を記念して編された「坂東眞本教行信證」である。これは坂東本を底本とする延書であるが、その解説として附されてある「教行信證延書古寫本の研究」は貴重な論考である。讀法の歴史を知るものは延書にして充分重要なことを了解してゐる。つづいて昭和二年、はじめ日本宗教大講座にのせられ、後、増補して「眞宗史の研究」におさめられた「眞宗諸派の歴史」は、今日なほこの方面唯一の文獻としての地位を保つてゐる。菊判八百頁にある巨

冊「眞宗史の研究」は昭和六年に出て居り、これに依て嗣講の學位を得、眞宗史學者としての地位を決定的にされた。なほ昭和二年より同六年まで京都帝國大學囑託として近衛文書の整理に従事されたが、同四年よりは山谷派宗學院主事を兼ね、六年よりは宗史編輯所編修員に任ぜられた。編修所は、のち「本願寺史料」を達如・嚴如兩上人時代四冊續刊し、以後時世の急迫と共に中止したが、本史料の刊行については、その計企其他に故教授の力與つて大なるものがあつたことは、いふまでもない。かかる事業は宗門學事の大計であり、しかも時をゆるがせにし得ぬものである。その復刊の速かならんことを祈るは故教授の遺志であらう。

三

昭和十四年安居の次講として「親鸞傳繪」を講ぜられたが、その講本は「本願寺聖人傳繪講要」と題され菊判三百頁上下二卷として印刷された。上卷は書誌學的研究、祖傳一般覺師傳、拜讀史等の總論篇であり、下卷は各節の諸本を對印してこれを解讀する對校解釋篇である。まことに繪傳に關する限り本書上下二卷に依て、そのあらゆる問題が網羅され討研されてゐるといつてよい。本書はその性質上一般に出なかつたので、すすめもあり還曆記念として出版すべく訂正増補につとめられ、延引その死直前までこれを書けられたと洩聞する。

昭和廿一年宗門は宗費並宗史蹟保存會を成立させたが、これは故教授が戰時中それらの散逸を憂へ、既に同十八年の頃よりこれを當局にしやうとされ來つたもので、文字通り故教授の手によつてなつたものである。その活動の第一歩に、忽ちに宗祖の眞蹟二本が発見されて斯界を驚喜させたことは未だ耳新しい。

なほ、昭和十六年、禿氏祐祥博士と共に日本佛教史學會をおこし、雜誌「日本佛教史學」を創刊された。これは戰後塚本博士等の「支那佛教史學」と合して「佛教史學」となつて現在に至つてゐる。我國斯學唯一の専門誌であり、困難なこの種の計画を執筆し逝去前までその代表委員としてつくされたことは、學界のもつて銘記すべきことがらであらう。

四

さて以上年譜的に業績の主なるものを述べて來たが、山田文昭師によつて基礎づけられた宗史學は、その大綱の上に故教授によつて、より具體的に進められたといへよう。即ち諸派の研究となり、史料の發刊、蒐集整理となつたのである。まことに正しい發展であり、そのあとの責に正にこたへられたものと稱すべきである。併しながらそれはそれで故教授により更に新しい基點が定められたこととなるのであつて、その成果はあげて後進の双肩にかかるといわねばならない。(一九五二・五・九)